

1 題材名 曲想に合わせて表現を工夫しよう

2 題材の目標

- アルトリコーダーの特徴に関心をもち、曲想に合わせて表現を工夫して演奏する学習に主体的に取り組む。
(音楽への関心・意欲・態度)
- 旋律から曲想を感じ取り、アルトリコーダーの奏法を生かしてどのように演奏するかについて思いや意図をもつ。
(音楽表現の創意工夫)
- 曲想に合った音楽表現をするためのアルトリコーダーの奏法を身に付けて演奏する。
(音楽表現の技能)

3 主な〔共通事項〕 旋律

4 題材設定の意図

本題材は、A表現(2)「ア 曲想を感じ取り、表現を工夫して演奏すること」、「イ 楽器の特徴をとらえ、基礎的な奏法を身に付けて演奏すること」を踏まえ、アルトリコーダーの様々な奏法を身に付け、曲想に合った表現の工夫をして演奏することをねらいとしている。

本学級の生徒は、器楽の授業に対して意欲的に取り組む生徒が多い。一学期には、「喜びの歌」を教材として、曲想に合わせて表現を工夫し、思いや意図をもってアルトリコーダーを演奏する学習を行った。生徒は、マルカートやスタッカートなどの表現の工夫を考えていた。しかし、生徒の演奏から、楽譜上の音やリズムを演奏するのに精一杯で、表現を工夫して演奏する段階まで、高まっていないことが分かった。また、「曲想を感じ取る活動」と「表現を工夫して演奏する活動」を関連させることができていないのが現状である。

そこで、はじめに、旋律など音楽を形づくっている要素に注目しながら原曲を聴き、曲想を感じ取る活動を行う。この活動では、原曲を聴いて受けた印象などを言葉で表したり、旋律のまとまりや音のつながり方などを図式化して整理できる楽譜を提示したりしていく中で、曲想と旋律の表現とのかかわりを意識できるようにする。そして、曲想を感じ取る活動で知覚・感受した旋律の特徴を基に、全体で意見を交換しながら表現を工夫する活動へと関連させていく。次に、「表現を工夫して演奏する活動」では、アルトリコーダーの様々な奏法を取り入れながら曲想にふさわしい表現を工夫する。その際、自分の演奏を録音し、それを客観的に聴き、表現の工夫が聴き手に伝わるかを自分で判断できるようにしたい。また、教科書に掲載されているリコーダー譜を編曲することによって運指等の難易度を考慮することで、表現を工夫して演奏するための奏法等の技能を身に付けられるようにしたい。

5 教材について

「これはなんとすばらしい音だ」 W. A. モーツァルト 作曲/長谷部匡俊 編曲

6 題材の評価規準

ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽表現の創意工夫	ウ 音楽表現の技能
①アルトリコーダーの特徴に関心をもち、曲想に合った音楽表現を工夫して、基礎的な奏法で演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。	①旋律や音色を知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気を感じしながら、アルトリコーダーの特徴を生かし、曲想に合った音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。	①アルトリコーダーで曲想を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けて演奏している。

7 学習活動と評価の計画（4時間扱い）

次	ねらい	主な学習活動	(共通事項)	題材の評価規準
第1次 (1)	○旋律を知覚・感受し、 曲想を感じ取る。	㊦「これはなんとすばらしい音だ」 ・原曲を聴いて、旋律の感じや曲想を 感じ取る。 ㊧「これはなんとすばらしい音だ」 ・旋律のまとまりや音のつなぎ方を意 識しながら、アルトリコーダーの様 々な奏法を試す。	旋律 音色	アー①
第2次 (3) 本時は 第2時	○曲想に合った音楽表 現にするために表現 の工夫をする。	㊦「これはなんとすばらしい音だ」 ・全体で冒頭4小節部分の旋律のまと まりや音のつながり方などを生かした 表現にするために奏法を試しながら 演奏する。 ・グループで、旋律のまとまりや音の つなぎ方などを考え、奏法を試しな がら練習をする。 ・グループでアンサンブルの発表をす る。		イー① イー① ウー①

8 本時の学習（第2次，第2時）

(1) ねらい

旋律のまとまりや音のつなぎ方などを工夫し、音を出して奏法を試す活動を通して、曲想に合った音楽表現にする。

(2) 準備・資料

「これはなんとすばらしい音だ」簡易楽譜，拡大譜，ビデオカメラ，タブレットパソコン，テレビ，プロジェクタ，スクリーン，ボイスレコーダー

(3) 学習の展開

学習内容と主な学習活動	教師の働きかけ（◆評価規準）
1 「これはなんとすばらしい音だ」 の冒頭部分を演奏する。	・前時で学習した冒頭部分は表現の工夫を加えて演奏し、表現の工夫の内容を振り返る。 ・工夫の仕方がかるように、前次に学習した「これが何とすばらしい音だ」の拡大譜を掲示する。
2 本時のめあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 旋律のまとまりや音のつなぎ方などを工夫して演奏しよう。 </div>	・前時にまとめたワークシートを生徒と一緒に見直し、奏法の例を黒板に提示する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 奏法の例 レガート，ノンレガート，スタッカート，ポルタート </div>
3 「これはなんとすばらしい音だ」 をアルトリコーダーで演奏する。 (1) 全体で合わせる。	・運指やリズムを確認するために全体で合わせる。 ・運指については、教師の運指の様子をプロジェクターで投影し、確認できるようにする。 ・運指やリズムでつまづいている生徒には、音をいくつか除いて簡単にした楽譜を提示する。

(2) 旋律のまとまり方や音のつながり方を考え、奏法を試しながら練習する。(4～5人グループ)

- ・旋律のまとまりや旋律のつながりなどを楽譜に図や記号で表す。
- ・奏法を試しながら演奏する。
- ・ビデオカメラやタブレットパソコンで録画、再生する。
- ・レガートやスタッカートなどの表現の工夫が、聴き手に伝わっているか確かめる。

(3) 工夫したことを楽譜にまとめる。

4 まとめの発表をする。

・4, 5人のグループを編成することで、各自が感じ取った旋律の特徴や曲想を話しやすく、また表現の工夫を練習しやすくする。

- ・考えた旋律のまとまりや音のつながりなどをグループ用の楽譜に図や記号、言葉で記入することで、見通しをもって練習できるようにする。
- ・レガートやスタッカートなど、どの程度の表現をすれば聴き手に伝わるか、ICT機器で録画や録音をし、生徒が客観的に自分の演奏を確かめられるようにする。
- ・ICT機器は数に限りがあるので、グループごとに順番を決めて録画や録音、再生を行うようにする。
- ・ICT機器を使えない時間帯にグループで合わせる際は、グループ内の一人を聴き手とし、互いにアドバイスしながら練習が進められるように助言する。

◆旋律や音色を知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気を感じながら、アルトリコーダーの特徴を生かし、曲想に合った音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。

(観察, ワークシート, グループの楽譜)

- ・本時の学習において工夫したことを言葉で説明させ、聴き手にその表現が伝わったかどうかを判断させることで、どの程度の音の切り方やつながり方で演奏するか分かるようにする。
- ・次時は、発表会をすることを伝える